



2016年度 天文資料

平成28年度 第9号 (12月号)

平成28年12月11日

発行：佐世保市少年科学館

佐世保市少年科学館



<12月はふたご座流星群が極大、宵の明星金星がよく見える>

数ある流星群の中でも、最も活発な活動を見せてくれる流星群の1つ「ふたご座流星群」、今年の極大日は13日の宵から14日の未明にかけてです。ただ、14日は満月のため、月明かりが明るく条件としてはよくありませんが、出現期間が12月上旬から20日ごろまでと比較的長く、この期間内の天気のよい夜に、月明かりを避けながら観測すれば、多くの流星に出会えるかもしれません。

また、夕方西の空にとっても明るく輝く宵の明星「金星」がよく見えるようになりました。少し上の方には火星も明るく輝いていますし、注意すれば、水星も見ることができるとも思われます。

今回はこの「ふたご座流星群」と夕方に見える惑星をご紹介します。

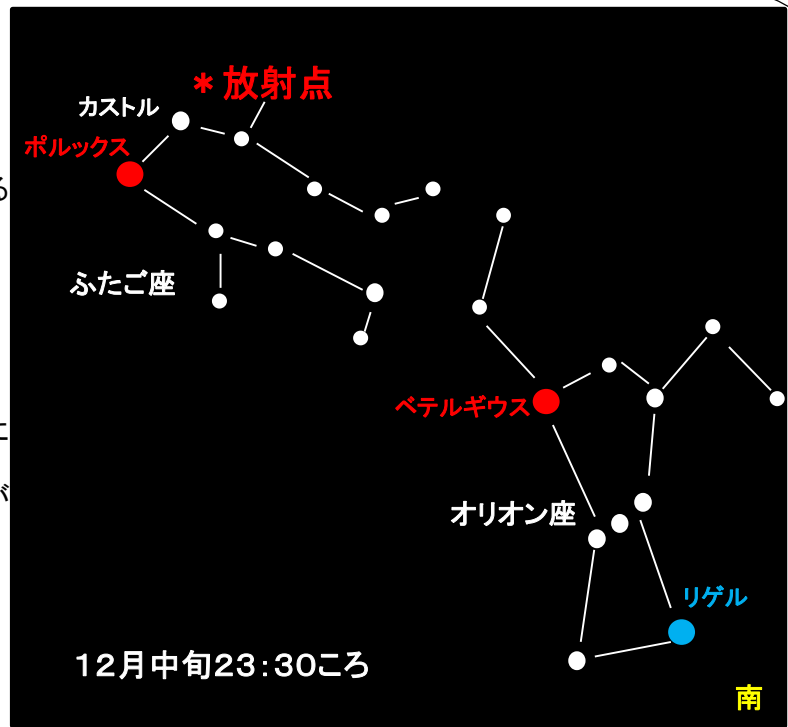
<ふたご座流星群が極大>

毎年師走に活発な活動を見せるふたご座流星群、今年の極大は13日(火)の宵から14日(水)の未明にかけてです。ところが、この時間帯は月齢14前後の大きな月が一晩中出るので条件としてはよくありません。しかし出現期間が長いので12月上旬から20日頃までの間に天気がよく、月明かりの少ない夜に空を眺めてみるのもいいでしょう。

ふたご座流星群の母天体※1は長らく謎でしたが、1983年にNASAの赤外線天文衛星IRASが発見した小惑星フェアトンが現在では母天体であると考えられています。なお、放射点※2はふたご座の2等星カストルの近くにあります。

※1 流星群を起こすもとになる天体。

※2 流星は放射状に出現する。その中心点を放射点と言う。



<夕方西の空で金星がよく見え、うまくすれば水星も>

12月に入り、夕方西の空で宵の明星として輝く金星の高度が高くなって、よく目立つようになりました。まだ明るいうちから「一番星」として光を放ち、多くの人に親しまれています。この金星、来年の1月12日に太陽から最も東に離れる東方最大離角となります。光度は-4.4等級。この時の金星を望遠鏡で見ると、金星の半分が欠けているのがわかります。その後、金星は地球に近づくので、望遠鏡で見ると大きさは大きくなり欠け方も大きく欠けるようになります。最大光度になるのは2月17日、この時の光度は-4.5等級です。そのあと3月の中ごろまでは見えますが3月の下旬には太陽と地球の間に入り込む内合となり、見えなくなります。

一方、水星は12月11日に東方最大離角となった後は、徐々に太陽に近づきつつありますが、西の開けた所で、金星を目印に双眼鏡を使えば見ることができるとも思われます。

